

## 第 14 回 男女共同参画学協会連絡会シンポジウム

国際的にみて日本の研究者における女性割合はなぜ伸びないのか？

日時 2016年10月8日(土) 10:00~17:45

場所 お茶の水女子大学 共通講義棟1号館、2号館

本年は、本学会より2名の委員が参加した。また学協会より午前の部、分科会1の会場係の依頼もあり、その時間は当該分科会のみ聞くことになった。また本年度は、総合討論会で掲示したポスターを用いたポスターセッションにも参加した。以下、午前中の分科会を中心に概要を記す。

### ■ 分科会1 午前の部、分科会1「Unconscious biasについて考える」

お恥ずかしいかぎりであるが、この表題の意味が何であるかをしっかり理解できていなかった。日本語では、「無意識バイアス」とか「潜在的バイアス」と訳されるらしい。日本での認知度は、以下の google のヒット数でみてもわかるとおり低い。

Google.com で『Unconscious bias』検索；約 6,520,000 件

Google.com で『Unconscious bias』ニュース検索；約 46,500 件

Google.co.jp で『Unconscious bias 日本』検索；約 71,500 件

Google.co.jp で『Unconscious bias 日本』ニュース検索；約 1,270 件

\*数字は、演者調査時のもの

ダイバーシティを推進するうえでキーとなるのが、この『Unconscious bias』で、考える以前の瞬時に浮かぶ先入観、固定観念を指すとのことで、過去の経験などから身につくものである。また他人に対することだけでなく、自分自身にも起こりうることである。米国大学ではこれに対処する努力が行われており、大学のトップになる人達の研修として『Unconscious bias』に関する講義が必修となっている。またミシガン大学にはダイバーシティに関するハンドブックが、ウイスコンシン大学にトレーニングコースなどがあるが、日本ではあまり注目されていないのが現状。具体的には、採用、人事、選考など多岐にわたり、日常生活の中でも起こっていることである。このバイアスがかかると評価に影響し、必ず悪い方向に動くとのことである。このような意識、非意識の乖離について理解する手法が、ハーバード大学で考案された Implicit Association Test (IAT テスト) である。下記のサイトはその日本語版である。

<https://implicit.harvard.edu/implicit/japan/>

また、それに関連して、大学が多様なライフスタイルを持つ研究者とともに発展するための「人事選考 10 の心得」などの講演が行われた。詳細は大阪市立大学女性研究者支援室 HP に掲載されているとのことである。

<http://www.wlb.osaka-cu.ac.jp/more-information/jinji10/>

また、様々な商品の購買決定に関して女性の関与が強く、企業は、モノづくりの観点で、女性の商品開発への起用をすべく理系女子の積極的な獲得を行っているが、根本的にその学生数が少ないことが問題で、その原因となる初等教育の見直しや保護者の意識改革を訴えていた。

#### ■ 昼の部、ポスターセッション

本学会より、昨年度開催分のシンポジウムの内容を記載したポスター発表を行った。複数名の方とディスカッションでき、『イクボス』に関する内容に関心が強かった。学会 HP のアクセス数とは別に、男女共同参画委員会 HP へのアクセス数をカウントできるとよいと思われる。

関心をもったポスターとして、応用物理学会は、学会期間中に NEWMAP (NETwork for Women and Men in Applied Physics) 懇親会という参加者同士でざくばらんな意見交換や情報交換会が行われているとのことである。

[https://www.jsap.or.jp/newmap/2016a\\_newmap.html](https://www.jsap.or.jp/newmap/2016a_newmap.html)

日本植物学会は、学会内でイクボスを探して、講演を行っている。イクボス度チェックなど、詳細は下記のリンクから。

<http://bsj.or.jp/jpn/members/2015luncheon.pdf>

#### ■ 午後の部、全体会議、パネル討論

文部科学省の取り組み、経済産業省の取り組み、米国の状況、韓国の状況。パネル討論で、産業界の状況、イギリスの状況などについて講演があった。午前中の講演と重複する部分もあったが、日本において課題が多いことが再認識された。詳細は[学協会の報告書](#)も参照していただきたい。